資本蓄積過程の一問題點

——ポール・スウイージーの『蓄積と勞働力の價値』について——

高木幸二郎

I スウィージーの問題提起と『解決』

ポール・スウィージーは，その『資本主義發展の理論』の第2篇第5章『蓄積と產業豫備軍』において，從來マルクス主義者たちによって『一般に看過』され，マルクス批判者たちによってすら『無視』されて來た『重要な點』『價値法則を勞働力商品に適用することのうちに含まれる困難』について語った後[1]，そのマルクスによる『解決』は，『資本論』第1卷第7篇第23章『資本主義的蓄積の一般的法則』の第3節以下に展開せられた『勞働豫備軍』により與えられるものと理解し，そのような說明を展開している[2]。いまスウィージーの問題提起とその解說の仕方の要旨を彼自身の文章を以て示せば次の如くである。

『さし當り吾々は，蓄積過程に含まれている可變資本量の增大——または同じことになるが，勞働力に對する需要の增大——の及ぼす影響の研究に關心をもつ。』『そこで吾々は，蓄積は勞働力に對する需要の增大をもたらすという疑問の余地のない事實から出發する。さていかなる商品でもそれに對する需要が增大すれば，その價格もまた上昇し，このことは價格の價値からの偏差を生ずる[3]。』

因みにいえば，マルクスが第23章第1節『資本の構成が不變の場合に蓄積に伴う勞働力に對する需要の增大』において論證しようとした主眼點は，『資本の蓄積はプロレタリアートの增加である[4]。』という言葉に端的に示されているように，蓄積が賃勞働者の隷屬的貧困の擴大にあるという問題にあった。しかしスウィージーにあってはそのことには觸れないで，需要の增大を直ちに價格の昂騰に直結せしめるブルジョア經濟學的手法を以ていることがここに看取されることを先ず注意しておく必要があろう。スウィージーはつづけていう。

『この場合普通の商品，たとえば綿布のようなものであれば，右のことは價格を價値に一致するように引戻すある力を發動させることになることを吾々は知っている。すなわち，綿布製造業者たちは異常な高利潤を得る，それ以外の資本家はこの綿布製造業にはいり込む氣になる，綿布の供給は增大し，價格は，それが再び價値に等しくなり，利潤が正常となるまで低下する。このように一般的原理を述べて見ると，吾々は直ちに一つの特徵的な事實に氣がつくのである。それは，勞働力は決して普通の商品ではない！ということである。勞働力の價格が騰貴する場合に，勞働力の生產に向いうる資本家は1人もいない。實際，綿布工業があるといった意味では，「勞働力工業」なるものはそもそも存在しないのである[5]。』

『蓄積は勞働力に對する需要を高める。そして賃銀と勞働力の價値の間の均等を單純に假定することは，もはや筋道に合わなくなる。その上吾々が右に見たように，利潤めあてに生產されるすべての商品の場合に價格と價値の同一性を回復するのに役立つ機構は，勞働力の場合には作用しない。價値法則を勞働力商品に適用する仕方にはある困難があるように見える[6]。』

この『困難』は，スウィージーによれば，比較的古くはボルトキェヴィッツが氣がついていたところのものであり，最近ではオスカア・ランゲが始めてこの問題の意義を指摘したという。スウィージー自身もここで，『實際，マルクスの全理論構造の妥當性がここで問題になるといっても決して誇張ではない[7]』とまで極言している。

このようにその發端において實際にはマルクスとは異った問題提起の仕方をした後，そこから生ずる『困難』について，スウィージーはマルクスが如何にしてこれを『解決』したかを說明する。

『しかしながら彼（マルクス）は，このような賃銀の昂騰は，「決してそのために制度そのものが脅かされるところまでは進行しえない」ことを確信していた。したが

1) Paul M. Sweezy, The Theory of Capitalist Development, 1942, p. 84. 中村金治譯『資本主義發展の理論』日本評論社，116頁。
2) Ibid., pp. 87 ff. 邦譯，119頁以下。
3) Ibid., pp. 83—84. 邦譯，114—115頁。
4) Karl Marx, Das Kapital, Volksausgabe besorgt von M-E-L- Inst., Bd. I., s. 645. 長谷部文雄譯『資本論』第1卷，日本評論社版第4册，104頁。
5) Sweezy, op. cit., p. 84. 邦譯同前，115頁。
6) Ibid., p. 84. 邦譯，116頁。
7) Ibid., p. 85. 邦譯，117頁。

って彼は次の問を發せざるを得なかった。剰余價値と蓄積が資本主義的生産の特質的なかつ本質的な形相をなすものとして存續しうるように，賃銀が上がるのを抑えているのは何であるか？この問は先に提起した問——賃銀を勞働力の價値に等しく保つのは何であるか——と裏はらの關係にあるから，一方に答えることは，同時に他方に答えることになる。

この問題に對するマルクスの解決は，彼の有名な「勞働豫備軍」あるいは同じく彼が名づけた「相對的過剰人口」の概念をめぐって行われる。豫備軍は失業勞働者より成っており，彼等は勞働市場で積極的に競爭に加わることによって，賃銀水準を絶えず引下げようとする壓力を加えるのである[8]。』

以上がスウィージーの問題提起とそのいわゆる『マルクスの解決』である。

II　マルクスにおける問題と解決

吾々はここでは先きに一言したスウィージーの發端における問題提起の仕方そのものについては觸れないことにして，彼が後段においてマルクスが『發せざるを得なかった』とする問，——『賃銀が上がるのを抑えているのは何であるか』——が裏はらの關係にあるというスウィージー自身の設問——『賃銀を勞働力の價値と等しく保つのは何であるか』——を問題としよう。問題はこの設問自體の中に含まれている。そもそもこの問は問として成立しうるのであろうか。いうまでもなく賃銀は，勞働力の價格としてそれが社會的全體において，かつ長期的賃銀水準として問題になる場合には，勞働力の價値そのものの價格表現にすぎない。したがってこの設問における『賃銀』がその意味で用いられているならば，この問自體は同語反覆の無意味となる。そして吾々がここでマルクスの蓄積過程の研究が社會的資本を對象としていることを想起するならば，賃銀もまた總體としての可變資本が轉化さるべき社會的總勞働力の一個別的分子の價値としてのみ問題になっているのだということを知ることができるであろう。

他方において賃銀は勞働力の價格として，他の商品價格と同じく短期的にはその價値から背離しうる。もしスウィージーが上記の設問において，『賃銀』という言葉をこの意味において使っているならば，この問自體が事實に反することになる。明かにこの場合賃銀は勞働力の價値に等しく保たれていないからである。だからスウィージーの設問は次のように言い直す必要がある。賃銀すなわち勞働力の價格は，何故長い期間にわたってその價値から背離しえないか？と。そしてそれに對する回答ならばスウィージーの如く『勞働豫備軍の概念』を俟たずして，すでにこの第 23 章第 1 節の中でマルクス自身によって與えられているものである。

『勞働價格の昂騰の結果として蓄積が衰える。利得の刺戟が鈍くなるからである。蓄積は減少する。しかしその減少とともに，減少の原因，すなわち資本と搾取されうる勞働力との間の不比例は消滅する。それ故資本主義的生産過程の機構は，それが一時的につくり出した障碍を自分自身で除去する。勞働價格は再び資本の增殖慾に照應する水準に下落するのであって，この水準がいまや，賃銀增加の始まる前の正常的水準と比べて，それ以下であるか，それ以上であるか，等しいものであるかにかかわりない[9]。』

ここにいう『勞働價格』の『資本の增殖慾に照應する水準』が，資本と勞働力の間の『不比例』が消滅した場合の賃銀水準であるかぎり，言いかえるならば勞働力の需要と供給の一致した場合の賃銀水準であるかぎり，一般に商品の需要と供給の一致した場合の價格は價値の大いさのそのままの表現である如く，勞働力の價値の大いさがそのまま勞働價格として表現せられた賃銀水準である。だからマルクスは，スウィージーがいうように，勞賃の昂騰による不拂勞働の量的減少が『決してそのために制度そのものが脅かされるところまでは進行しえない』ことを『確信していた』のではなく，すでにここで資本の構成が不變な場合における蓄積の機構において，したがっていまだ『勞働豫備軍の概念』を想定することなくして，これを證明したのである。それ故にマルクスはこの第 23 章第 1 節の終りでいう。

『かくて勞働價格の昂騰は，資本主義制度の基礎を侵害しないばかりでなく，ますます增大する規模でのこの制度の再生産を保證するような限界內に閉じ込められている。したがって一の自然法則にまで神祕化された資本主義的蓄積の法則は，實際には次のことを表現するにすぎない。すなわち，蓄積の本性は，資本關係の絶えざる再生産と絶えず擴大される規模でのその再生産を眞に脅かしうるような，勞働の搾取度のいかなる減少も，勞働價格のいかなる昂騰をも排除するということ[10]。』

したがってスウィージーがその設問を正當化するために使った『勞働力工業』の如き擬制は，それ自體むしろ資本主義的再生産過程に對する理解の缺陷を暴露するものであって，勞働力商品の生産と再生産こそ正に資本主

8) Ibid., p. 87. 邦譯，120 頁。

9) Marx, op. cit., s. 651. 邦譯同前，116 頁。

10) Ibid., ss. 652—653. 邦譯，118—119 頁。

義的再生産過程，したがってまた資本の蓄積過程の内部的契機をなすものであり，それが資本の自己運動として行われるということの理解の不徹底に由來するものである。それは，マルクスがこの節で以上の諸引用との關連から批判の對象とした『自然的人口法則』，勞働力の不足と過剰が，資本の增加と減少の結果として把握されずに，『勞働力の數量の獨自の運動に起因するように見える[11]』資本の物神性を超克しえたものではないのである。

III　勞働力の價値の概念と蓄積過程における勞働の價格

上記のスウィージーの設問とマルクスにおける問題の展開に關連して，ここに確認しておかなければならぬことは，賃銀の本質が勞働力の價値表現だということは，蓄積を扱ったこの第 23 章では，本來單純商品生産の價値法則そのものからすでに論理的に導き出されている與件として，前提されていることだという點である。不拂勞働の存立は勞働の社會的生産力の一定の發達を條件としており，分業と私有財産に基ずく生産物の商品化は，この勞働生産力の發達に貢獻しつつ，その一定の發達段階において勞働力そのものを商品化するに至る。そこに資本關係が成立するのであるが，すでに一度資本が成立すれば，不拂勞働の確保と勞働力の價値そのものの一定水準の決定は，資本自身の運動によって行われる。マルクスがこの第 23 章第1節で，資本の構成が不變の場合にも資本の蓄積が資本の自己運動として行われ，勞働力の價値が勞働の價格すなわち勞賃として現實化されて行く過程を證明していることはすでに見た通りである。言いかえるならば，勞働力の價値の概念は勞働價値說の必然的な論理的歸結として，資本關係の歷史的形成を背景として確立されたものであり，蓄積過程の研究はその現實的運動の態容を明かにすることにある。

然るにスウィージーの設問と『解決』においては，蓄積過程を問題とする場所において，すでに確定されておるべき筈の勞働力の價値の問題を再び蒸し返し，しかもその勞働力の價値は勞働力商品化の擬制においてあたかも先驗的に與えられたものの如く考えられ，勞働の價格が產業豫備軍の壓迫作用によって押し下げられ，それによってのみ不拂勞働の確保がなされ，ここに勞働力價値概念の確認が行われうるというわけであるが，そのようなものではない。マルクスは蓄積過程を扱ったこの第7篇に先立つ第6篇において，『勞賃』の標題の下に勞働力の價値が如何にして『勞働の價格』なる現象形態に轉化するかを詳細に檢討している。第7篇第 23 章で勞賃が問題とされても，特に勞働力の價値なる言葉は現われず，先の引用文中にも見られる如く『勞働價格』のみが問題とされているのも，この前提に立っていればこそである。下落した勞働價格の水準が『いまや賃銀增加の始まる前の正常的水準と比べて，それ以下であるか，それ以上であるか，等しいものであるかにかかわりない』という言い方がなされるのも，ここではもはや勞働力の價値の概念の確認が問題ではなく，その勞働價格における現實的な運動の態容が問題であるにすぎないからである。

この點マルクスが第6篇第 17 章で，經濟學は『分析の進行が勞働の市場價格からいわゆる勞働の價値を導き出したばかりでなく，さらにこの勞働の價値そのものを再び勞働力の價値に歸着せしめるに至ったことを明かにしなかった[12]』と述べている批難は，そのままスウィージーにあてはまるといえよう。上記のスウィージーの推論からすれば，彼は個別的な商品の市場價格の需給關係による變動が，生産價格（費用價格＋平均利潤）をめぐって行われる關係のみを以て，そのまま勞働價値說の立證と見なしており，勞働力商品の場合にはこのような生産價格が存在しないが故に，『價値法則を勞働力商品に適用する』ことには困難があるように見えるというわけであるが，價値概念は生産價格の概念に先行するものであり，また逆に生産價格の法則の立證が直ちに勞働價値說の十全な立證となるのではない。要するにスウィージーやオスカア・ランゲは，ブルジョア經濟學者の勞働價値說否認の前提から出發した需給法則的推論過程の擒となっているのであって，いわば彼等のつくった土俵で角力をとっているのである。したがってスウィージーの立論を以てしては，利潤の源泉を低賃銀を以て說明したことにはなっても，勞働價値說の基本的擁護にはならない結果に終る。そしてこの價値論の理解における基本的缺陷が，資本の自己運動としての蓄積過程の現實的動態を，一定の社會的關係の自己疎外として，物の運動への外化として把握しえない結果を生じ，それがまた必然的に彼の恐慌論における過少消費說なる形而上學的現象論と結びつくのである。

11) Ibid., s. 652. 邦譯，117 頁。

12) Ibid., s. 564. 邦譯第3册，449 頁。